

中国帰国者三世研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-12-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山崎, 哲 メールアドレス: 所属: 一橋大学
URL	http://hdl.handle.net/10086/0002061536

2025年6月4日

申請者：山崎哲(YAMAZAKI, Satoru)

論文題目：中国帰国者三世研究

論文審査委員：飯尾 真貴子

根本 雅也

小井土 彰宏（亜細亜大学教授）

I. 本論文の概要

山崎哲氏の学位請求論文『中国帰国者三世研究』（2025年1月提出）は、大日本帝国の崩壊後、旧満州国地域に残留した中国残留孤児・婦人等の孫世代にあたる、日本生まれの中国帰国者三世に焦点をあて、彼らがなぜ社会の中で「見えない／見えにくい」存在となっているのか、その構造的なメカニズムの解明を試みている。一見すると日本社会に溶け込み、学校教育においても大きな問題を抱えていないように見える日本生まれの「中国帰国者三世」は、研究者からは捕捉されえない死角となってきた。この難題に対して筆者は、自身の経験を分析的に描くオートエスノグラフィーと、複数の調査協力者への生活史調査とを組み合わせることで、「中国帰国者三世」がなぜ自らを語る言葉を持たずに生きざるをえないのか、その内面に深く分け入りながら接近している。本論文は、そうした手法を通じてこの困難な問いに迫ろうとする労作である。

第1章では、中国帰国者をめぐる日本国内の認知に大きな影響を及ぼしたマスメディアの報道の減少が、中国帰国者三世にいかなる影響を及ぼしたのか検討している。第2章では、日本社会において見えにくい存在である中国帰国者三世が、互いの存在を認識し、その相互作用を通じて、自らを語る言葉を獲得していく過程を明らかにしている。第3章では、日本生まれの三世が不可視化されていく過程を、筆者自身の人生をもとにオートエスノグラフィーの手法を用いて描き出している。この章では、中国帰国者三世として自己を呈示することが日本においていかに困難であるか、またその背景には、マイノリティとして自身の経験を言語化し、中国残留という自己につながる歴史に触れにくい状況があることを明らかにした。続く第4章では、筆者自身の経験から考察を広げ、「普通」の日本人へと同化していく三世たちの不可視化のプロセスについて、学業達成と実存的移動という観点から検討している。第5章では、中国帰国者三世が「中国帰国者」としてのアイデンティティを獲得することがなぜ困難なのかを論じている。一世や二世は日本への移動経験を通じて自己認識を形成してきたのに対し、日本で生まれ育った三世には越

境経験がなく、日常生活の中で「中国帰国者三世」としての意識を持つ契機が乏しいことを指摘している。また、2000年代に終結した中国残留孤児国家賠償訴訟裁判以降、一世同士が経験を共有する場や、その裁判を支えた二世・三世によるコミュニティも消滅したことで、中国帰国者に関する集合的な活動そのものが失われたとされる。こうした状況のなかで、日本生まれの中国帰国者三世が、自らのアイデンティティを歴史と積極的に接続することはますます困難になっている。以上の議論を踏まえ、本論文は、中国帰国者をめぐる記憶が風化するなかで、三世たちが中国帰国者としての自己を意識する機会を持たず、自らを語る言葉も持たないまま、他者からも認識されず、社会のなかで不可視化されていると結論づけている。

II. 本論文の成果

本論文の第一の成果は、これまで日本社会で不可視化され、また中国帰国者研究においても論じられてこなかった、日本生まれの中国帰国者三世に焦点をあてた点にある。なぜ多くの中国帰国者三世が社会において見えなく／見えにくい存在となっているのかという問いに対し、自らの経験を分析的に振り返るオートエスノグラフィーを用いてアプローチした。過去のさまざまな局面における筆者自身の悩みや心の揺らぎといった内面的な変遷を活写する繊細な記述を通じて、ルーツを「秘匿」し、自己を語る言葉を持たずに成長した経験がもたらす痛みと葛藤を鮮明に描き出した。このように、自らの経験を学術的議論の俎上に載せることで、これまで社会や学術において他者表象の「死角」となってきた人々に光を当て、中国帰国者研究の新たな領域を切り拓いた意義は極めて大きい。

第二の成果は、日本社会において中国帰国者三世として自己呈示する者は限られているなかで、研究方法としてオートエスノグラフィーにとどまらず、アクセスが困難である日本生まれの中国帰国者三世のルーツを持つ人々への生活史調査を組み込んだ議論を展開した点にある。従来の研究で不可視化されてきた人々の内実に迫った本論文は、資料的価値としての重要性を有するだけでなく、調査協力者に会うことができないという調査上の困難を内面的に問い直す試みでもあった。この問い直しを通じて、「中国残留」という自己につながる歴史に触れることの困難さ、そしてそれを生み出す「不可視化」の構造的メカニズムに接近することが可能となったといえる。

第三の研究成果は、従来の中国帰国者研究をふまえつつ、日本の帝国主義および植民地主義の歴史を背景に持つ現代の中国帰国者三世の姿を具体的に描き出した点にある。本論文は、日本の帝国主義の歴史性を背負いながら、移民第二世代という特徴を併せ持つ筆者自身と他複数名の「中国帰国者三世」の経験を掘り下げることによって、日本におけるポストコロニアル移民研究の射程を拡張し、帝国支配の記憶と歴史が今日の移民と家族の諸経験にいかに刻印されているのかを解明する意義を有している。

III. 本論文の課題

こうした成果とともに、下記のような研究上の限界も指摘できる。

第一の課題は、「不可視化」のメカニズムについて、さらに深く掘り下げる余地がある点である。本論文は、中国帰国者三世が社会において不可視化される要因として、1) マスメディアによる取り扱いの減少による中国帰国者の社会的忘却、2) 日本社会における蔑視を避けるための中国ルーツの秘匿、3) 家族内における歴史的記憶の継承の難しさから生じる、自己を語る語彙の獲得の困難、を挙げている。これらは、不可視化の要因として一定の説得力を持つものの、メカニズムを明らかにするのであれば、これらの要因の相互連関について明示的に分析として示す必要があった。また、家族史の継承をめぐる難しさについては、歴史的な文献資料や先行研究の整理と再解釈を通じて、単なる個別の事情にとどまらない、集合的記憶の継承が困難となる社会的状況をも明らかにできたのではないだろうか。

第二の課題は、本論文における生活史調査の扱いである。従来の研究がたどりつけなかった「中国帰国者三世」にあたる人々への聞き取りは、資料として非常に貴重な価値を有している。ただし、その分析・記述は、オートエスノグラフィーに見られるような厚みや水準には、なお達していないように思われる。匿名性の担保という研究倫理に則することは当然であるが、自己の記述から他者の記述へと分析を拡大する際には、共通する要素や差異、さらにはそれらを生み出す要因を特定し、より掘り下げた分析が必要であったと指摘できよう。

第三の課題は、本研究が貢献しうる研究領域の射程に関わるものである。本論文は、先行研究として主に従来の「中国帰国者研究」の枠組みにとどまっており、今後は中国帰国者以外の具体的事例と対比させることで、その特徴と学術的意義をさらに明確化していく必要がある。加えて、＜戦争＞トラウマの世代間継承の困難といった、より自覚的なポストコロニアルな文脈との接続や、既存の移民研究との対話を一層深めていくことが求められる。

IV. 結論

以上、主な問題点を記したが、これらについては口述試験の質疑応答において、筆者自身の見解が説明され、今後の課題としても認識が得られた。近い将来の研究においてこれらが克服されていくものと十分に期待できる。また、これらの課題にもかかわらず、本論文が達成した成果を損なうものではない。審査委員一同は、上記のような評価にもとづき、本論文が当該分野の研究に大きく寄与するものと判断し、一橋大学博士（社会学）の学位を授与するに値するものと認定する。

最終試験の結果の要旨

2025年5月9日、学位論文提出者、山崎哲氏の博士学位請求論文『中国帰国者三世』について最終試験を行った。提出論文に関する疑問点について審査委員から逐一説明を求めたのに対して、山崎哲氏はいずれも的確に応答し、十分な説明を与えた。よって、審査委員一同は、所定の試験結果をあわせ考慮して、一橋大学学位規則第5条第3項の規定により、山崎哲氏が一橋大学博士（社会学）の学位を授与されるのに必要な研究業績および学力を有するものと認定した。